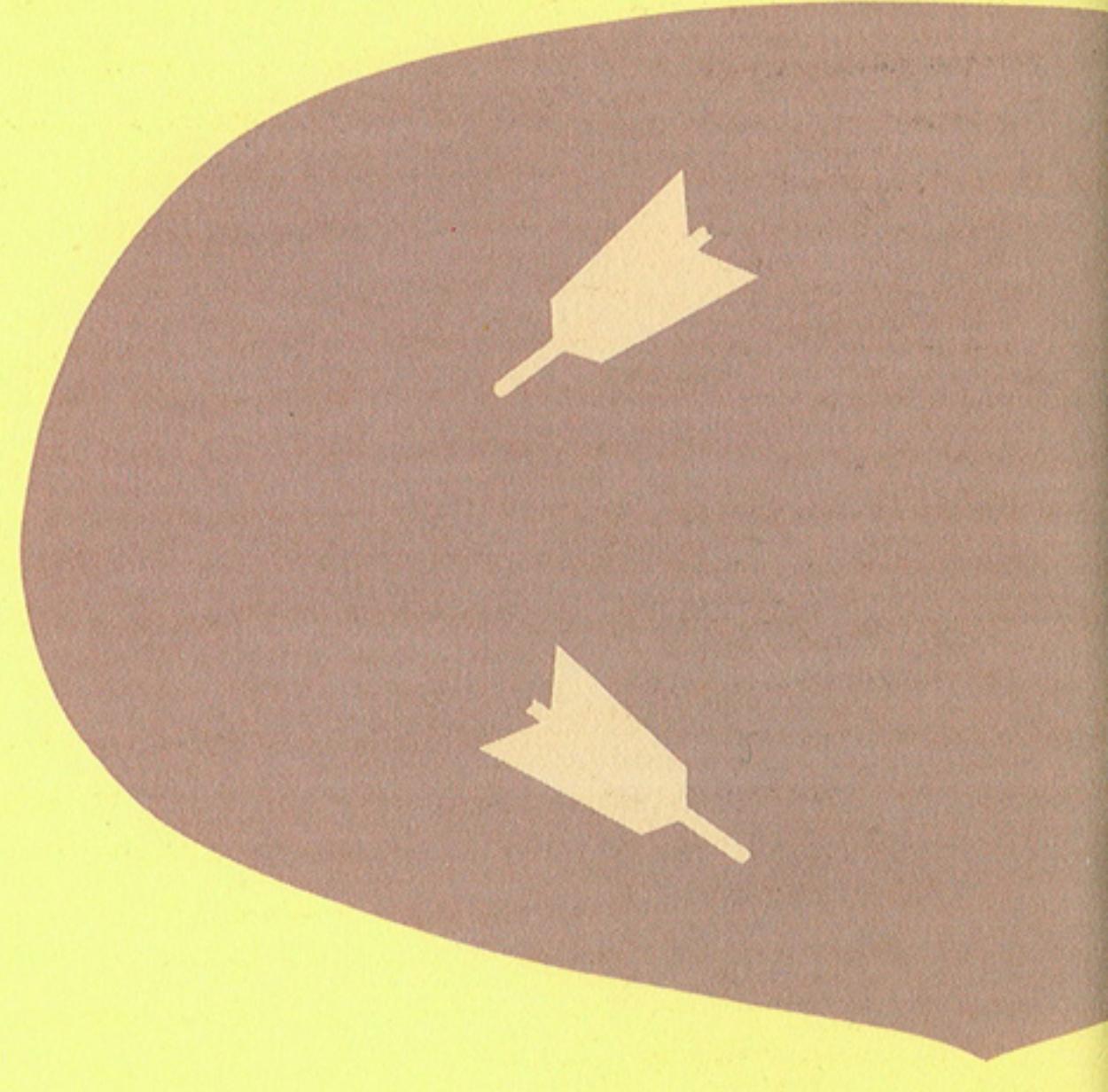


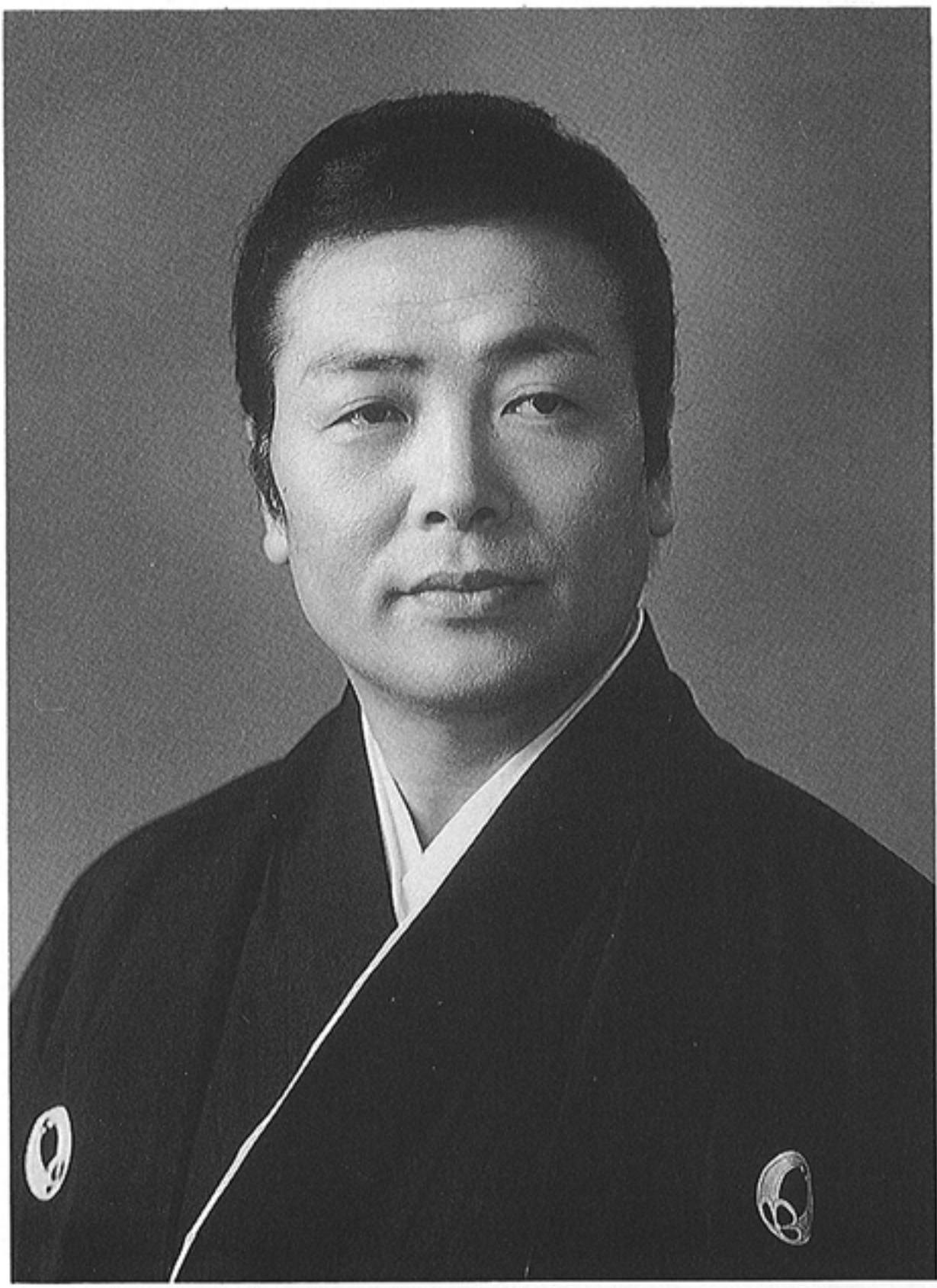
棟苦勧二郎九合と
棟九合



題字・東大寺長老 清水公照

棟苦勧士郎此会と
棟此会

国立劇場小劇場
平成九年六月十五日(日)



頭取 模若助



宗家 模若助二郎

御挨拶

本日は皆々様方にはようこそお越しくださいました。

第一部「模の会」は門下生中心の舞踊会、そして第二部の「模若勧二郎の会」もお蔭様にて第二十六回公演を迎える運びと相成りました。返り見ますれば昭和四十九年秋、明治座に於きました第一回を開催スタート。その後二十有余年皆々様の温かきご教導ご支援に支えられ回を重ね、お蔭様にて昭和六十一年度に芸術祭賞を受賞致しました。そして(社)日本舞踊協会東京支部城東ブロックの会員として活躍しそのたびごと私なりに成長致して來たような気が致します。

つねに大きな課題に挑戦し果てることのない苦しみと悩みの中で作舞し舞台づくりに取組んできました。どうにか皆様にご覧頂ける舞台が出来上り本日を無事迎えることができました。

此度の新作「當り矢口説」は長田午狂先生が私の為に書いて下さった作品で私なりに練り上げ作舞したものでございます。作曲の中島勝祐先生をはじめ美術の碇山先生各スタッフの諸先生方も十二分に私に精通され家族同様の皆様方の作品であり舞台づくりでございます各先生方のご苦労に対し敬意を表すると共に厚く御礼申し上げます。

又、今回の舞台づくりに意欲的にご支援下さった各スタッフ諸先生方に深く御礼申し上げます。

三曲共それぞれの趣にて模若勧二郎の世界を演じ分けて見たいと存じます。どうぞ厳しい御叱正各々の番組にお寄せ頂きましてこの「模若勧二郎の会」と「模の会」を皆々様のお導きでお育て頂きますようお願い申し上げる次第でございます。

未筆乍ら私の門弟より此度の舞台で新名取として

中村昌子こと師範 模 若 勸寿恵（新潟）

高橋幸子こと名取 模 若 勸南海（千葉）

北林秀子こと名取 模 若 勸 倭（東京品川）

の三名の者達が舞台を勤めます。

私共同様お引立ご鞭撻の程お願い申し上げます。

又、日本舞踊の楽しい舞台と御愛好を心よりお願い申し上げます。

本日のご来場心より厚く厚く御礼申し上げます。

平成九年六月十五日

模 若 勸二郎

制作 模 若 勸 助

第一部



開演 午前十一時

大和楽

岩田道之輔作詞
大和久満作曲
堅田喜三久作調

寿

模若新之助

大和楽の小品で最も新しい曲です。
松の緑のめでたさより始まり、雅楽
風の曲調に乗せて優雅に舞いあげま
す。

大和楽

宮戸川山本美代子

岩田道之輔作詞
大和久満作曲
堅田喜三久作調

隅田川の支流宮戸川の夏景色が涼
しげに表現されている小曲です。
後半に「緑かいな」を入れての上
演です。

大和楽

岩田道之輔作詞
大和久満作曲
堅田喜三久作調

娘みこし

模若勧桜治

浅草の三社祭りを町娘で明るくお
きやんに踊ります。
オカメの面をつけての振りもおも
しろく短いながらも楽しい演じ物で
す。

大和楽

雪の隅田川模若桃幸

長田幹彦作詞
岩上千み作曲

雪の夜に蛇の目傘をさした年増の
粹な女、男の人に逢うためにたたづ
む姿は、一枚の絵の世界です。
アンコに「わがもの」を入れて一
層せつない女心が伝わってきます。

長 唄 鶴

亀

模 若 勸南海

能の「鶴亀」にかたどり、春の始めに宮中で事始めの儀式が行われる、嘉例により鶴亀の舞楽が奏せられる。皇帝と鶴と亀の三人立ちですが、今回は鶴の一人立ちで二上りの「千代のためし」からを舞います。最も位どりと気品が必要とされる踊りです。

長 唄 島 の 千 歳

模 若 勸美穂

朝日の昇る海辺に鶴亀遊ぶ蓬莱の島の述べて以下千歳のうたう今様に見立てて唐、天竺の水の事故をのべ、初春の風景をうたい若水のめでたさで曲が終ります。前半を男舞風に上品に位どりをして舞い、後半二上りからは、娘風に華やかにそして、チラシ風の早間は拍子をうまく活かして踊り込みます。

大和樂 雪 折 竹

模 若 藤之助

雪折竹というのは、雪が積もり、雪の重みに耐えかねて折れる竹のことです。最初に『へひるがえす雪の袂』と降る雪を、さす手、ひく手の舞姿になぞらえての雪の描写があります。やがて一面の銀世界となり、日暮れて明かりのついた家の中から三味線の音が聞かれます。耳をすませば

へうそのかたまり、城の情け、真ん中にかくれて、降る白雪の人ごころ、積もる思
いとつめたいと、わきて言われぬ世の中の』

哀調をたたえた語り口です。しかし、そもそもやがて終わりへ風ひややかに、雪折竹の声ばかり、更けゆく夜半に積もる白雪』静寂の雪の世界に戻つて曲は終わります。

篠 宮 川 臨 風 作詞
寿 朗 作曲

模 若 藤之助

長 唄

橋

弁

慶

牛若丸

模

若

勸乃舞

弁慶

模

若

勸

大和楽

三十

石の夜船

篠川臨風
岸上み

作詞
作曲

模若勸規

武藏坊弁慶が京の五条橋で牛若丸に出会い、さんざんになぶれながら聞つた末、ついに降参して主従の契りを結ぶという、能の「橋弁慶」によつて作られたものです。全体に武張つた踊りですが、弁慶の剛と、牛若の柔の対照が面白く、松羽目ものらしい莊重さと上品さが喜ばれて流行曲の一つとなつています。

長唄あやめ浴衣

模若勸寿恵

端午の節区を中心に初夏薰風の大川端の風物を踊ります。蛇の目傘をさして八ツ橋の上に立つた姿はまるで絵の様です。傘、あやめの特技、ちりめんの手拭、そして扇、傘と小道具の扱いも非常に多く、美しさと姿能美の動きが見どころです。

清元

傀

師

模若勸都

街頭芸人のかいらい師が町の辻々の人形を見せる風俗舞踊です。まず首から人形の入った箱を下げる出で、お七・吉三の人形を見て三人息子の特長を踊り分け、軽快な八百物づくしの「チヨボクレ」と続きます。踊りの中でも非常にむづかしいとされています。

大和楽

邦枝完二作詞
宮川寿朗作曲

おせん

萩と月入り

行水の おせん描いた紅筆を 水に落した夕まぐれ 回り燈籠がくるりとまわるが、最初の唄い出しの文句です。

蚊帳と行燈は昔の下町、露地の奥の併び住居、夏の宵やみを描くのはなくではならない道具立てです。そこに行水をすませたおせんの姿がありました。

へこうもり来い、行燈の光をちょいと見て来い、こんなわらべ唄、夕方の軒先にとぶこうもりといつしょに子供はかけ回りました。萩に流れる蚊やりを他所に。
へ廻り燈籠がくるりと廻る なんとも風雅な情景です。

清元

お

祭

り

模若勸倭

若い者 中村蝶十郎
若い者 齊藤勝人

江戸山王日枝神社の祭礼を当て込んで出来た曲です。粹な芸者が酒気嫌で出て若い者にからまれての踊り、そしてクドキ、再び若い者との大立廻り 特に今回は入れ事として面踊りを入れた楽しい舞台です。

長 咲 静 と 知 盛

模 若 勸 秀

船弁慶を新しく一人立て踊れる様に作った曲です。西国に落ち行く義経主従と静の別れ、海上に知盛の亡靈があらわれ、弁慶の折りで退散すると云つた筋です。見どころは、前半で「都名所」の静の舞であでやかな柔らかさと、別離の哀感、後半は技倆の他に体力、気迫、そして亡靈としての凄味も必要とされる所です。中でも至難とされる花道の引込み迄付けての上演です。

清 元 文 売 り

模 若 扇 史 郎

逢坂山の関所を通る商人が、「文売り」の物語を踊つていくという趣向の舞踊です。京都島原の傾城大淀が「こもちやまんば 姫山姥」の八重桐の扮装をし、恋文を結んだ梅の枝を持つて登場します。そして八重桐のシャベリの形を借りて清元のセリフと畠み込みながら振りを見せるところが独特な趣向になっています。へこれは色を商う文売りでござんすの名乗りや、クドキのあと、傾城の二人が一人の男を取り合つて、掴み合いの喧嘩となる顛末をしゃべり踊つて見せるくだりが眼目です。

長 咲 菊 慈 童

模 若 劍 桃

中国の周の国を治めていた穆王に仕えていた慈童が王の枕をまたいだ罪で麗県山に流されました。山に入る朝、慈童を見送る王は慈童に毎朝観音経をとなえる事をさとし二つの経文を教えました。

山へ入った慈童は王から教わった紀文を忘れぬ為に菊の葉にしたためている時菊の花のしづくが落ちそのしづくが川へ流れその水を飲んだ慈童とその周辺の村人達は長生きして幸せに暮らしたと云うことです。ちなみに慈童は七百余歳を生き名を彭祖と改めたと云うことです。

長 唱

模 高 岸 長
若 橋 上 田 幹 彦 作曲
勸 二 郎 嘉 市 美 効果
引 和 絵 姿 柳 振付

鐘

模 若 勸 柳

この曲は昭和二十二年に出来た作品です。

能の道成寺から取材した曲です。

内容は、安珍を慕う清姫の女の執念を扱ったものです。短い曲ですが、三味線の手も多く、長唱を思わせるような曲です。大和楽の中では難曲に入る曲です。

当流では、初演の時、先代家元にお願いして大和楽のきれいな唄い方をすこみのある唄い方でお願いし、効果音等を入れて女の情念を体全体で表現する振りをつけ模若勸二郎が六十一年度芸術祭賞を頂いた作品の一つでもあります。

清 元

女

車

引

千代 模 若 勸 保

春

模

若

勸

代

八重

模

若

小

勸

千代 模 若 勸 保

『菅原伝綬手習鑑』（すがわらでんじゅてならいかがみ）の、松王・梅王・桜丸の車引きの場を、その女房の千代・春・八重にして観せる内容で、珍しくも今に伝わる吉原の俄の踊りの一つであります。作詞は三世桜田治助、作曲は清元千歳で、本名題を『五諸車引哉袖襷』（ごしそぐるまひくやそでづま）と言い、舞台面も衣裳も総て歌舞伎の車引に則しています。踊りは始めにその当て込み入れ、豆太鼓を使つた鹿島踊りのあと、肌抜きの総踊りからチラシで終わりますが、この趣向は顧見世淨瑠璃の『車引和絵姿』（くるまびきやしえすがた）よりの借用ということです。

※お断り

一部・二部は客席が入替制になつておりますので
二部をご覧頂くお客様は恐れ入りますが入場券を
改めてお求め頂きますようお願い申し上げます。

第二部

木下喜久二郎九合

開演 午後六時

長 咲 時
雨 西 行

江口の君 模 若 勸二郎

西行法師 模 若 劍助

能の「江口」を舞踊化した曲で、いまは出家の身となつた西行法師は諸国を旅する日々を送っています。ある日、時雨の降る夕刻、江口の里に着き一軒の家を見つけて一夜の宿を頼みます。応対した女は「女の一人住い」を理由に断わると、西行は「世の中を厭ふまでこそ難からめ仮りの宿りを惜しむ君かな」と歌を口ずさみます。女はその歌に感じ入り、返歌をして西行を泊めることにしました。

二人はそれぞれの身の上を話し合い、西行は女が遊女であることを知ります。

ところが西行が目を閉じると不思議なことに遊女は普賢菩薩となつて現われます。巧みな脚色ですが、遊女が居どころで菩薩にかわる手法が苦心を要し、内容的にも通り一遍の表現では観客に満足感を与えられぬむずかしい踊りです。

今回は五十七年のABCホールでの初演以来の再演になります。当流では江口が舟遊女の設定で演出をして演じております。

長 咲

鳴 物

三味線 東音 東音 東音 東音	中島 三野村 原尾 勝利	皆川 木田 岳 男 康益	川藤 倉 瑞 喬	皆川 木田 岳 男 康益	堅田 喜三久
坂村	太勝	健			
原利	三助祐				

荻江

深

ふか

川

がわ

八

はつ

景

けい

模若勸二郎

四世荻絵露友作曲。明治初年の羽織芸者で盛んな頃の深川名所を近江八景になぞらえて唄つた粹な曲です。深川木場の近江屋喜左衛門という米穀問屋であつた露友が、生国である近江国の名勝と、住んでいた深川の遊里や名所とをからませてこの曲をつくつたといわれます。

三下りで全部を通じて手も実によく、荻江の特色が濃厚に出て、昔の深川の四季の移り変わりなど、よくしのばれます。

荻江

荻 荻 荻 荻
江 江 江 江
寿 露 露 露
永 恵 春 芳 舟 友

鳴物

福 望 堅 藤 藤 中 望
原 月 田 舎 舎 井 月
百 太 八 次 郎 呂 円 一 長
七 宏 英 秀 夫 樹

新作

當 あた 模 堅 中 長
若 田 島 田
り り 勸 喜 勝 午
二 三 郎 久 祐 狂
矢 や 振 作 調 作 曲 作

口く

說 ぜつ

長
唄

東音 東音 東音 三味線 東音 東音 東音 東音 嘴
塚村 三中 野 原尾 村島 木皆 藤皆 田川 倉川 川
勝慎 太勝 岳 珊 利三助 祐 男 康益 健

模 若 勸 二 郎

鳴
物

福 望 堅 藤 藤 中 望 堅
原 月 田 舍 舎 井 月 田
百 太 八 次 七 郎 呂 円 一 長 喜 三 久
宏 英 秀 夫 樹 久

歌

詞

持ち忘れられなくなつたのは 菊月一旬一日の
らだら祭りと異名のある 神明さまの祭禮に 門前^{ぜん}だ
町^{ちょう}でばつたり出会い 一緒^{いっしょ}にお詣りしたあとで 氏子^{うじこ}
の振舞^{ふるまい}う甘酒^{あまざけ}を 二人寄^{ふたりよ}り添^そい飲んでから 社^{やしろ}で授^{さず}
ける千木管^{ちぎば}と 生姜^{しょうが}市^{いち}で根^ねつかちを 買つてくれた
親切^{しんせつ}が身^みにしみじみと嬉^{うれ}しくて つい踏み込^こんだ恋^{こい}
の道^{みち}店^{みせ}に来るたび 情^{じょう}を尽^{つく}してもなしてても 知つてか
知らずか手^て応^{ごた}えなく いつそのことに心^{しん}の臓^{ぞう}を 射^射い抜^{ぬき}
いてやりたいじれつたさ ええ何^{なん}としよう 鮑^{あわび}じやな 姫^{ねえ}
いが片^{かた}思^{おも}い いと人^{ひと}残^{のこ}つて的^{まと}前に さんたちは馴染^{なじ}みの客^{きゃく}と 時^{とき}の鐘^{かね}に店^{みせ}じま
い出すのは勤めに慣れぬ矢^や返^{がえ}しのころ 客^{きゃく}の弓^{ゆみ}引^ひく思^{おも}い 亂^{みだら}れ散^ちる矢^や見るにつけ 姬^{ねえ}

お尻を 目掛け 悪戯客に 射られた 鏃で 青痣だらけ
痛さに 幾度も 流した 泣 それも いつしか 駐れ覚え
んでくる 矢を あちこちと 赤い腰巻チラつかせ 突嗟き
にかわす 身のこなし お尻たたいて 当てて 御覧と 笑え
顔で誘う ゆとりも 出来て 次の稽古は 左引き
胸につかえる 初恋の 待ち人占い 右引きでと 一いち
途に当たり 矢念じつつ 射れば 金的 大当たり
ずむ心の中 途端に 聞えるスリバンに すわやめ組の
出番よと 表へ駆け出し 眺めても 火の手のあがる様
子すはなく 会いたき 凝つての空耳かと 気付けば ドジ
な我が姿 月に見られて恥ずかしい
今夜も千木 箍抱いて寝て 夢で会つたら 胸倉らと
て口くせつ尽して泣いてやろ 神明さまへの願掛け
だらだら祭りの神さまゆえ いつになつたら 叶うやら
だらだら続くだらだら恋慕 ドンドンカチリ
チリ ドンドンカチリ ドンカチリ ドンカ



河東節 浮世傀儡師
平成六年度模若勤二郎の会
—特別リサイタル舞踊公演より—



新作 ひとよだけ

ひとよ草の精・きのね 楠若勧二郎
京の若者・餓禮 嵐 徳三郎
平成六年度楠若勧二郎の会
—特別リサイタル舞踊公演より—

河東節 葵の上

平成四年度文化庁芸術祭参加
—楠若勧二郎の会より—

清元 青海波

平成六年度 楠若勧一郎の会
—特別リサイタル舞踊公演より—



新作 初丸髻

平成七年度 文化庁芸術祭参加
—楠若勧一郎の会より—





新作 初丸髻

平成七年度文化庁芸術祭参加
—模若勧二郎の会より—

清元 青海波

平成六年度模若勧二郎の会
—特別リサイタル舞踊公演より—



長唄 四季の山姥
平成七年度文化庁芸術祭参加
—模若勧二郎の会より—



長唄 灰屋吉野
平成七年度文化庁芸術祭参加
一模若勘二郎の会より一



模若扇史郎



模若藤之助



模若勸柳



模若勸桃



模若勸桜治



模若新之助



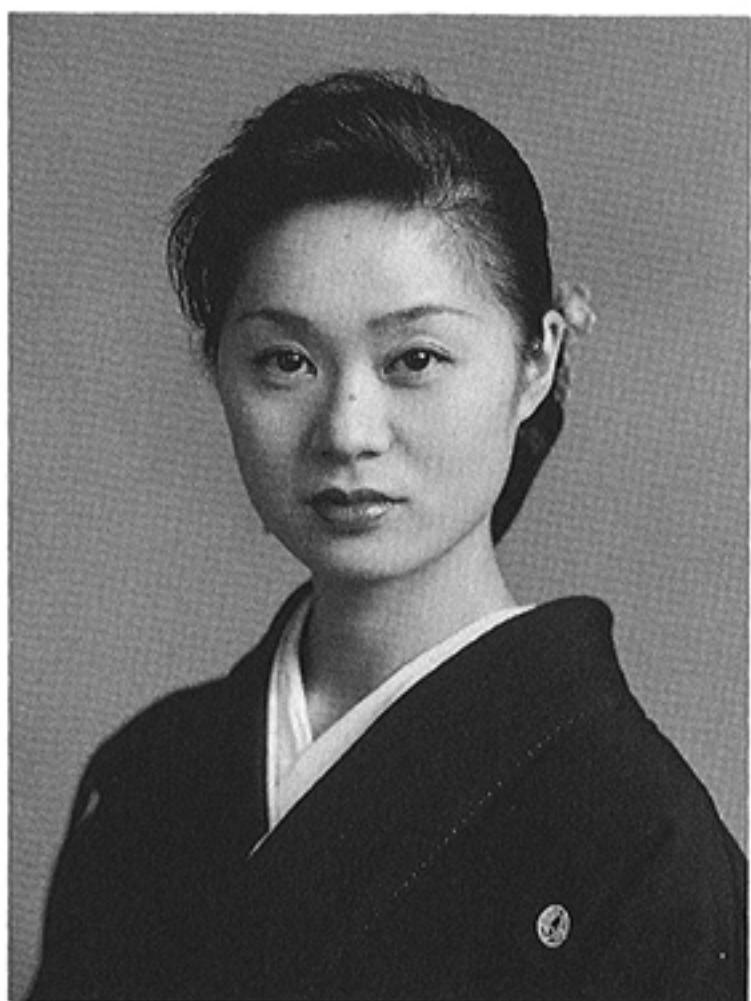
模若勧保



模若勧秀



模若勧都



模若勧代



模若勧規



模若小勸



模 若 勸寿恵



模 若 勸美穂



模 若 勸樹



模 若 勸南海



模 若 勸乃舞



模 若 勸央



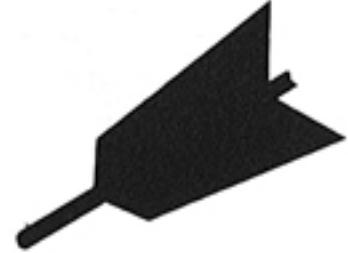
山 本 美代子



模 若 桃 幸



模 若 勘 倭



地方連名

唄
長唄

東音皆川
東音藤倉
東音皆川
東音珊

東音中島勝
東音三野村尾勝
東音太島勝
東音利三助祐

三味線
東音中島勝
東音三野村尾勝
東音太島勝
東音利三助祐

東音村原勝
東音三野村尾慎
東音太島勝
東音利三助祐

清元

淨瑠璃

清元成美太夫
清元小成太夫

清元益美太夫

三味線
清元益代

清元成太郎
清元益二郎

唄
荻江

大和
大和三千世
大和左礼子
大和美世溥京子

三味線
大和久滿
大和久芳枝
大和緒芳枝

大和久芳枝
大和久芳枝
大和久芳枝
大和久芳枝

荻江
江江
江江
江江

三味線

荻江
江江
寿露
永惠

琴
米川裕枝

福原月百七

堅藤藤中望
田舎舍井月
呂円一長
宏英秀夫樹

鳴物
堅田喜三久

模の会・模若勧二郎の会スタッフ

主催	後援	事務	制作	演出	印刷	レイアウト	写真	VTR	狂言	つけ	後見	後打	顔見	床打	床見	床打	かづら	衣裳	道具	音響	照明	美術
宗家 模	高巴屋	模 模	模 模	(有)東清	サンライフ	・真	・真	R	竹	橋	高	市	市	中	田	山	山	市川衣裳	松竹	小道	明	大
頭取 模	屋	若 若	若 若	ウメ	プリント			Y	櫻	斎	高	市	中	寿			市川衣裳	小道	音響	立劇場	國立劇場	碇山
模若若	嶺後援	事務	勤務	邦水	メ				水	柴	沢	藤	橋				株式会社	宏	照明部	音響部	照明部	宏康
勸一郎	助一郎	所助	助郎	企写三	ワ				企	太	勝	敏						喬	音響部	音響部	美術部	康
流	会	助郎	カ	真郎	ト				カ	真郎	画郎	勇人	廣門	島	山	喜						

